『女水滸伝』論

――「江戸の水滸伝」のうち――

石川秀巳

一

伊丹椿園はその著『椿園雑話』のなかで、小説愛好の深さを次のように表白した。

予幼き時仮名の草紙物語を好みて読ならひしより、今猶三十に近からんとすれども尚小説野史を好て読の癖やまず。書店を探りて古蔵を求め、また清の舶より新に持渡る物の題号を聞ては必求め読んとす。（中略）予が如き愚昧の輩は見て無益なりと止んと欲すれども能はず。然れどもいかほど鄙俗の書たるともみな勧善懲悪に本ずき世用人事に便なる事を含ざるはなし。(1)

小説の効用として「勧善懲悪」を言挙げするのはこの時代に通有なのだが、椿園の創作において、それは建て前あるいは弁解にすぎなかったと言い捨ててしまってよい体のものだっただろうか。

本稿で取り上げる『女水滸伝』（四巻四冊、天明三年〈一七八〇〉刊）は、その書名から明らかなように、『水滸伝』の翻案であることを標榜した作品である。巻頭に載る「皇都笑花逸翁」の題詩が、羅貫中をも凌駕すると椿園の才を賞賛してみせるのも、両作の関係を踏まえてのことだっただろう。

読椿園女水滸伝
伊水少年綵筆開
閑中戯著圧羅才
脂粉集傑談何巧
奇快洗心十六回

椿園が中国小説の中から『水滸伝』を選び出して翻案を試みたのは、無論、それが「小説第一の書」だからである。序文は刊行に至る経緯を次のように語る。

忠義水滸伝は羅貫仲が世に卓たる英才を以て大に精神を費して著せしものなれは、其妙巧奇絶諸名子の賞嘆する所にして、小説第一の書とするに論なし。後世に続水滸伝・後水滸伝の作あれ共、豈よく模擬し得へけむや。我邦また凉岱なる者の著せし本朝水滸

伝あり。作意の巧拙はしらず、文辞上世の体に擬したれは、識者の案上にも到るべし。僕前年女水滸伝といふを書つゞりぬれと、例の疎懶に任せ草々の漫筆、余りに鄙俗なれはと人にも見せず、久しく筐底に投し置しか、一日反古を尋探る序に取出せし折しも、書賈来り、是を見て、日本水滸伝と題せるを出し、此書児女迄もよく通するを以て今世に行るれは、君か此草帋もむなしく紙魚に飽しめむよりは我に与へよと、頻りに求るにつよくも辞得す、我に等しき作者も有けるよと笑て終に諾す。

それとともに、当時の流行にのったということもあった。『本朝水滸伝』や『日本水滸伝』（『坂東忠義伝』）に触発されて執筆したと言うわけである。卑下の調子を感じさせる一方、『本朝水滸伝』については「識者の案上にも到る」のが「作の巧拙は」ともかく「文辞上世の体に擬した」こと、すなわち涼岱（建部綾足）が雅文で執筆したことによるのだとするところには、対抗意識が読み取れなくもない。笑花逸翁の言うように羅貫中を凌駕するかどうかはともかくとして、『水滸伝』翻案というもくろみに対する椿園の意欲を認めてよいだろう。

『椿園雑話』には、前引の個所に続いて、次の記事があることもよく知られている。

予が家に平妖伝といふものあり、則ち羅貫中の作なるよしにて、（中略）甚だ奇怪を究め趣向面白き事三国志、水滸伝に劣らず。此の書至て世に稀なるよし。（中略）訳文して世に行んと欲すれども活業にまとはれ、未だ其暇を得ざるなり。

家蔵の稀書『平妖伝』をいずれ翻訳したいと述べるのだが、実際には翻訳には到らず、そのかわり、『平妖伝』からの影響が指摘される『両剣奇遇』（五巻五冊、安永八年〈一七八〇〉刊）を執筆することになる。「応永年中、秦織部なる者在りて、幻術を以て、党を結び、足利の家を亡ぼさんと計りし事」[2]を綴ったものである（序文）。王則が胡媚児ら妖人とともに北宋王朝に対して起こした反乱の顛末を語る『平妖伝』。それにもとづいて、少年時から殺人・強奪を重ねてきた秦織部の奸悪を中核としてその破滅までをたどるこの物語には、勧懲の主題が貫いていると言ってよい。『両剣奇遇』の場合はある意味で容易だったが、『水滸伝』の翻案を企てる椿園は、江戸の作者たちが直面したいっそう困難な〈悪の主題〉の問題――百八人の盗賊集団が同時に忠義士でもあるという二重性をいかに形象するかの問題――を抱え込まざるを得ない。『女水滸伝』において、どのようにして「勧善懲悪に本ず」くことが可能だったのだろうか。

ところで、『水滸伝』翻案の眼目は、書名を「〈女〉水滸伝」とし、題詩の「脂粉集傑談」が端的に表しているとおり、百八好漢を女に移すところにあったわけである。いま、江戸文芸の中に〈女の水滸伝〉の系譜を立ててみよう。『水滸伝』に想を得て、女性の英雄集団の活躍を語る、次のような物語群である。

(1)伊丹椿園『女水滸伝』

(2)好華堂野亭『新編女水滸伝』（読本、六巻六冊、文政元年〈一八一八〉刊）

(3)曲亭馬琴『傾城水滸伝』（合巻、十三編、百巻五十冊、文政八年〈一八二五〉～天保六年〈一八三五〉刊）
(4)十返舎一九『名勇発功談』（中本型読本、五巻五冊、文政十一年〈一八二八〉刊）

これらの中でもっとも著名なのは(3)『傾城水滸伝』であろうか。『水滸伝』とは男女を反対にして、その結果百八人のほとんどが女になるわけだが、高俅の役に後鳥羽院の寵妾亀菊をあて、その専横に立ち上がった女侠たちとの、女対女の対立抗争を主題化する。『水滸伝』にほぼ密着して翻案するのである。(2)『新編女水滸伝』は、『女水滸伝』の登場人物・趣向などに基づき、源平合戦期に時代をとり、平家の残党が源氏に戦いを挑む話に作り替えている。また、(4)『名勇発功談』は篠塚伊賀守の娘伊賀の局が、新田義興の遺児を押し立てて、勇婦らとともに足利家に抗していく物語である。本書には、未刊のまま稿本が残された第二編も存在するが、それには「一名女水滸伝」とあって、『女水滸伝』に依拠した創作であることを明かしている。『傾城水滸伝』にまで影響を与えたのかどうか明確ではないけれども、『女水滸伝』をこうした〈女の水滸伝〉の系譜の原点に据えることができる。

それにしても、椿園は〈女の水滸伝〉などという発想をどこから得たのだろうか。歌舞伎の〈女武道〉など、男顔負けの剛勇ぶりを見せつつ女ならではの魅力を発散させる趣向に対する関心はすでにあったから、その影響を考えてもよいかもしれない。いずれにせよ、本作を論ずるには、『水滸伝』の翻案として検討するとともに、〈女賊〉をどのように形象したのかを問題としなければならないはずである。〈女の水滸伝〉を創する意図はどこにあったのか――その考察は、椿園の考える「勧善懲悪」の意図とも関わってくるに違いない。

かつて浜田啓介は本書を次のように評した。

作者に着想を生かす筆力のないのが致命的欠陥で、記事法は拙劣、事柄・人物出入等の齟齬不説明も多い。(3)

たしかに物語の完成度は高いとは言えない。記述の不足や矛盾が散見されもする。しかし、本書は『水滸伝』受容史・翻案史の上で興味深い問題をはらんでいるのである。その点に留意して、むしろこの作品の持ち得た可能性を探ってみたい。

二

まず、『女水滸伝』が『水滸伝』からどのような趣向を取り入れたかを確認しよう。

第一回「猛秀錦繡を買て罪に沈む／玉園謀計を須て恨を報す」、堺の悪徳役人宿弥図書から妹玉園を妾に求められ拒絶した柳下猛秀は、盗賊の罪を着せられ、牢内で自害する。玉園は妾になると偽って図書の屋敷に赴き、酒を勧めて泥酔させ、刺殺しようとする。計略を察知した図書との争闘に及び、一時は危く見えたものの、折から屋敷に忍びこんでいた芦乗八郎の助力を得て、復仇を果たす。

『椿園雑話』には、同内容の『烈婦匕首』が挙げられる。

或人の曰、近比長崎の何某烈婦匕首と題し、清朝にて悪逆なる官人ありて人の妻に心を掛け、其夫を盗賊なりと無実の罪に沈め害しけるに、妻憤りにたへず偽りて妾となり、始て至る日の夜に酒を進め官人を沈酔せしめ害して其家を抜出、首を夫の墓に手向けて我も縊れ死したりし事を記し、梓行せり。これ清の商人の専ら語り伝へし事なるよし、有名の人の序あり、此事実なるべしやと論ず。予も此書を見たるに、全く石点頭十二巻侯官県烈女殲讐と題せし小説と同じ。これを取て清人の偽り語しにや、事の案に符号せるもの歟

徳田武は、『烈婦匕首』の作者と同じく椿園も『石点頭』第十二巻「侯官県烈女殲仇」を喜んで、この挿話を翻案したと指摘する[4]。ただし、右の要約は『烈婦匕首』や『石点頭』よりもむしろ『女水滸伝』に近いのである。「侯官県烈女殲仇」では、「人の妻に心を掛け」たのは「悪逆なる官人」ではなかった。「盗賊なりと無実の罪に沈め」る方法も、『烈婦匕首』あるいは『石点頭』では、すでに捕縛された盗賊の一人に言い含め、偽りの自白をさせた故となっていて、猛秀の場合とは異なる。この部分に『水滸伝』の趣向が絡み合わされたことを見逃すべきではない。贋商人を使って品物を売りつけ、それによって猛秀を陥れるという設定は、『水滸伝』第七回「花和尚倒拔垂楊柳／豹子頭誤入白虎堂」に拠る。林冲の妻に横恋慕した高衙内のためにその養父高俅は、林冲が刀を買うようにしむけたうえ、刀を見たいと偽って林冲を宮廷内の白虎節堂に誘い込み、謀叛の冤罪をかけて滄州に配流する。『水滸伝』翻案の多くが採用する林冲故事を採り、『石点頭』あるいは『烈婦匕首』の烈婦による仇討ち物語を重ねて、女の事件に変換したのである。いずれにせよ、『水滸伝』の翻案を標榜する本作が『水滸伝』以外に素材を求めたのは、それらが「烈婦」あるいは「烈女」の復仇を語っていて、そうした点において、〈女〉の活躍を語ろうとする本作の方向に合致したからに外ならないだろう。

第五回「朝路夫を欺いて很僕に通し／春雨父を失ふて継母を害す」、摂州神崎の長の妻朝路は、使用人円二との密通を続けるために、夫に讒言して養女春雨を勘当させ、さらに円二と共謀して夫を毒殺するが、長の亡霊に真相を告げられた春雨が、深夜長の家に忍び込み、朝路・円二の二人を殺害する。この部分は、『水滸伝』第二十五回「王婆計啜西門慶／淫婦藥鴆武大郎」、第二十六回「偸骨殖何九叔送喪／供人頭武二郎設祭」、妻潘金蓮と密夫西門慶によって毒殺された武大郎のために弟武松が仇を討つ一条をもとにしている。春雨が金銭を奪った体に偽装するのは、同じ武松の物語のうち、第三十回「張都監血濺鴛鴦楼／武行者夜走蜈蚣嶺」の、張都監一家を惨殺した後で酒器などを懐にして逃走したところを思わせる。また、長の霊が現れて自分の殺されたことを告げる趣向も、武大郎のそれを受けている。もっとも、春雨の出生の秘密を告げ、朝路らの罪を暴くなど、長ははるかに雄弁である。かすかに現われては消えて非業の死であることを暗示するのみの武大郎の面影は、玉梓に自分の死を告げて消える猛秀の霊に写されている。

第八回「乱に乗して始て蛮国を辞し／危きを脱れて終に駒岳に帰す」、波羅遮国から戻った芦乗八郎らは、足利義勝の命を受けて海浜守禦の任にあたっていた松浦弾正に捕えられ、都に送られる、死刑の裁きが下るが、刑場を襲ってその妻たちが救出するという挿話は、『水滸伝』第四十回「梁山泊好漢劫法場／白龍廟英雄小聚義」、謀叛の容疑で処刑されようとした宋江を、旅商人や乞食を装った晁蓋らが救出する条に基づく。役人たちのために海岸に追い詰められるが、あらかじめ配備した船によって窮地を脱するという設定も、大河に行く手を阻まれた梁山泊一党が、晁蓋らとは別に宋江の救出を図っていた張順の船によって逃れえたという展開を、女侠たちの深謀遠慮に置き換えたものである。

これを機会に宋江は賊の仲間に入り、梁山泊軍が態勢を整えたわけであるが、生駒山の山塞に籠った一党が威を奮うところにそうした点も写し取られたのは確かだろう。

また、明確なものではないけれども、人物造形に『水滸伝』好漢の面影を写したところがある。

芦乗八郎ら盗賊集団は日本で盗みためた品物を波羅遮国まで運んでいって高く売り払う。海外渡航のための快速船を登場させたりもする。生駒山の山塞を一方の拠点にしつつ、物語は海洋を背景にする場合が多いのである。そのなかで「海」の要素をもっとも濃厚に体現するのは、司馬太郎の妻龍岳であろう。

剣術早態勝れ、殊に水練の妙を極め、千尋の海底に沈し鉤にても拾 取事嚢中の物を探るよりも容易しけれは、夫と同じく常に海上を往来しける……　（第二回）

それゆえ波羅遮国に帯同するわけだが、第三回「火を放ちて衆闘戦をなす／水を潜りて独躱避をうる」、一党が波羅遮国の役人と悶着を起こして役所を焼き討ちするに及んで、捕縛の兵が船に迫ったとき、龍岳は浪を潜って逃れるほどの水練の技をふるう。

龍岳莞爾と笑て身を躍し、海底深く飛入て二丁はかり浪を潜て、巍峩たる巌の有けるに躋攀て跡を顧みたれば、国人は已に溺れ死したりとや思ひけん、再ひ尋ず、船中の屍首を取て悉く海へ投込、船を牽て遠く去にける。

あるいは第四回「瓊の浦姉妹危きを逃れ／墨の江親子逢ことを喜ぶ」、西国侍の拐かしに遭い、長崎まで連れてこられた月華・雪光が船から身を投げたところを救ったのも、波羅遮国から帰国した龍丘である。

前面に形ち異なる一艘の船有て、其中より一人の女出て同く海に飛入を怪しと見る中に、其女二女を左右に抱き浮み出てやす〳〵と船に飛乗ば……

この「水練の妙を極め」た龍丘の設定は、浪裏白跳張順から発想したのではないか。

龍岳には別の人物像も重ねられている。龍岳は、一党が毒薬の計略によって捕われとなるなかで、ただ一人毒を食することがなかった。また、波羅遮国の三王が龍岳を慰み物にしようと先を争うとき、誤って顔に大きな傷を受けてしまう。こうして顔の大きな傷と一人毒にあ

たらなかった人物と言えば、半面を青痣におおわれ、生辰綱押送のとき蒙汗薬のために部下が倒れるなか一人無事だった、第十六回「楊志押送金銀担／呉用智取生辰綱」の青面獣楊志が想起されるのである。

銀銭の礫を続けざまに的中させて見せる夕虹（第四回）は、没羽箭張清を写したものと考えられるし、鉄禅杖を振回す怪力の尼僧禅月（第七回）は、六十二斤の鉄棒をも軽しとする花和尚魯智深を模しているだろう。占いに通じ、軍師となる白井秀蘭（同前）は、智多星呉用に通ずる。

右に挙げた類似点の中には可能性を指摘するにとどめなければならないものも含まれる。しかし、山塞に結集した女侠たちが座次に並ぶのは明らかに、『水滸伝』に度々あらわれる趣向を受けたものである。なによりも、女たちが籠って足利の軍隊と戦う生駒山の山塞が梁山泊を写したものに外ならない。

三

それぞれの物語を背負った個性豊かな好漢たちが登場し、闘争や出会いを通して次第に結集するところにより大きな物語を成立させる――『水滸伝』が持つこうした集団小説的構想を、椿園はどのように受容したのだろうか。

『女水滸伝』の中で、女たちについては一応の個性が与えられている。たとえば、玉園は美貌とともに「侠気強く、区々たる婦女の態を好ず、万つ事をなすに都て男子の如く」だったし、八郎の妻となってからは、夫に「武芸」や「忍術を学ぶことを楽とし」、後には党内のだれも「敵する者なき程に至」ったという。一党の首領となる玉園にふさわしい造形と見るべきであろう。秀蘭を軍師に、龍岳・春雨・禅月を戦闘員に割り当て、夕虹・雪光・月花親子は「女」性を強調されて遊廓の経営による特異な軍略にかかわらせるなど、その役割が設定される。

その一方で、男たちは年齢も性格も不明のままである。芦乗八郎は図書邸で玉園の危機を救ったとき、

某も図書に聊恨る事ありて、害せん為今宵忍び入し……（第二回）

と、図書との関わりを暗示されたし、「更に碌々たる人物とは見へず、

已前は大家に仕へし身なれども、縁故有て暇を乞、爰に世を避隠遁を楽み暮し候へども……（同前）

と龍岳に語らせてもいて、なにほどか人物像に陰影をつけようとしているようなのだが、これ以上に踏み込もうとはしない。司馬太郎は龍岳の夫というだけでその面影は浮かんでこないし、天平太と鬼藤内の二人も描き分けられてはいない。だからこそ、

鬼藤内が妻は春雨と呼て、摂州神崎辻の長といふ者の娘なり。（第五回）

と、鬼藤内だったはずの春雨の夫が、

天平太此辺りに来る時は、必ず此家を宿りとして数日逗留しけるゆへ、長・朝路も親熟となり、饗応疎かならず。春雨も婢僕と同く飲食 浴臥に心を付てあしらひしに、天平太常に力量 武術の事を談じけるゆへ、羨しく思ひ、逗留の間戯れに力を競るに、天平太更に及ず。亦慰みに武芸を教ゆるに、心さとく、早く通得して、後には一般の手者と成しに、いつの程よりか密通して十分綢繆となり……　（同前）

と、天平太に変わったり、さらに、朝路らを殺害したあと、夫の行方を求めて秀蘭に占ってもらおうとするときには、再び、

春雨も此誉れを聞、秀蘭が元に尋ね行て、鬼藤内が住所を尋ければ……　（同前）

と、鬼藤内に戻ったりするような混同が起こるのだろう。こうした男性登場人物に対する無関心さからは、「女」の物語を書こうとする椿園の意図が改めて浮かび上がるのである。

八人の女賊はそれぞれその出自を語る物語を各回に配当されて、（第一回）玉園→（第二回）龍岳→（第三回）夕虹・月花・雪光→（第四回）春雨→（第五回）秀蘭→（第六回）禅月、のように登場してくる。横山邦治は、本作の構想を次のように概括した。

各回女主人公を出現させるために筆を費して、それらの各回が全体を構成する部分をなし、それに、女主人公たちの配偶者が蛮国に捕えられ、やがて帰国して逮捕される、謀計による救助から生駒山の山塞にこもるという構想でしめくくる。(5)

たしかに、女賊を一人ずつ登場させることに展開の機軸をおいたのは横山の指摘するとおりである。それらの挿話間のつながりは稀薄ながら、王進から史進へ、史進から魯智深へ、魯智深から林冲へ……と、中心人物を次々に交代させつつ好漢の出会いを語っていく『水滸伝』列伝部のダイナミズムを、銘々伝を連鎖させつつ女賊の結集を語る『女水滸伝』が模していると見ることができよう。

では、そうした連合の紐帯となるものは何であったのか。

『水滸伝』の好漢達の結義は義侠的な共感がその基盤となった。お互いの言動の中に義を発見し、あるいは声望を聞いて近づいて行く、などといったかたちで結集するのである。しかも、第一回の魔星出現と第七十一回の石碣降下との呼応が示すような、百八好漢の運命的な連結の構想によって、そうした結びつきが裏づけられていた。その構想は物語内の世界像に関わる。

この作品の特徴として、『水滸伝』の超自然的要素を捨象していることが挙げられるだろう。

その大筋は通っていて、長編小説としての骨格は整っているといえるのであるが、女主人公を出現させるための挿話に重点がおかれて原水滸の末梢的翻案が目立ち、しかも原水滸冒頭の悪星を走らす構想の翻案がないため、全体の統一が不十分で、散漫という評も止むを得ないところがある。(6)

横山邦治が強調するように、『水滸伝』の翻案を標榜しながら、発端の趣向は取りこんでいない。椿園は超越的な力による世界の支配を物

語化しなかった。『水滸伝』ではそれこそが好漢の結集を促したのだが、椿園はそれを移入しなかったのである。冒頭に百八好漢の登場を予告し、既知の数字への収斂によって集団の結集を語ろうとする『水滸伝』の〈定数の主題〉――『湘中八雄伝』が北斗七星（と輔星）の転生である朝夷義秀ら八勇士に、『忠臣水滸伝』が大星由良之助ら四十七士に、『南総里見八犬伝』が里見八犬士に置き換えて保持したような――を、『女水滸伝』は受け入れていない。八人の女賊の〈八〉という数字は特別の意味を与えられておらず、超越的な力による結集は語られることがない。しかし、横山のように「原水滸冒頭の悪星を走らす構想の翻案がないため、全体の統一が不十分で」あると評するのはどうだろうか。魔星出現と石碣降下による物語枠とは別に、椿園なりの統一の意図が存したかもしれないと考えてみることが必要であろう。

超越的な力の冥々裡の支配という結集原理を、女たちを統合する原理として導入しなかったかわりに、椿園はきわめて現実的な統合原理を用意した。たとえば、摂州神崎の長の娘春雨が女賊集団に加わるのは、次のような玉園の誘いによってであった。

四人の夫は同胞の兄弟よりも親しく、死生を蛮国に同じくすれば、我々も姉妹の思ひをなし、力を一致にして、再び彼土に渡海し救ひ帰らんことを種々に慮る也といふを聞て、春雨も其節操を深く嗟嘆し、今よりは暗愚なりといへども我も党中に加へたまはらば、努力して命に随ひ仕べし　（第六回）

「夫は同胞の兄弟よりも親し」いから、「我々も姉妹の思ひをなし、力を一致にし」ようというのである。もともと盗賊集団をなしていた夫たちの結びつきが、彼女たちの結党の根拠となる。椿園は、女賊たちに盗賊の妻（夕虹は妾であり、月華・雪光は娘）であるという設定を与え、夫の縁によって結義を果たさせた。偶然に出会ってゆく女たちが、それぞれの夫・父のつながりを媒介として結義するのは、『水滸伝』におけるもう一つの結集原理である義侠の確認による結義を変換したものと解釈することができよう。

魔星出現の趣向をそのまま利用することのなかった椿園は、超自然的、運命的紐帯を現実的紐帯へと変換して語った。女たちの行動を規定する原理として〈婦徳〉を導入したのである。

四

舞台を波羅遮国（ペルシャ）にまで広げる構想の特異性について検討しておこう。

まず、椿園はどこから波羅遮国という素材を見出したのだろうか。

第三回冒頭で、芦乗八郎らは波羅遮国に到着する。

日本を離るゝこと海上五千百里、天竺の内にして天竺開闢最初の地なるよし。黄金の大塔あり、十五里の外より望み見る。如此富饒比ひなく、諸国往来の商船集り至るの湊ありて財宝奇珍を窮れ共、日本より至ることは這様奇巧の船に乗ずんば歳

月を積とも至ること成難ければ、日本の貨物を大に尊み重じ、千万の価を論ぜず、国人競ひ集りて交易をなす。

この記述が次に引く西川如見『増補華夷通商考』（宝永五年〈一七〇八〉刊）に基づいたことを杉田英明が指摘している(7)。

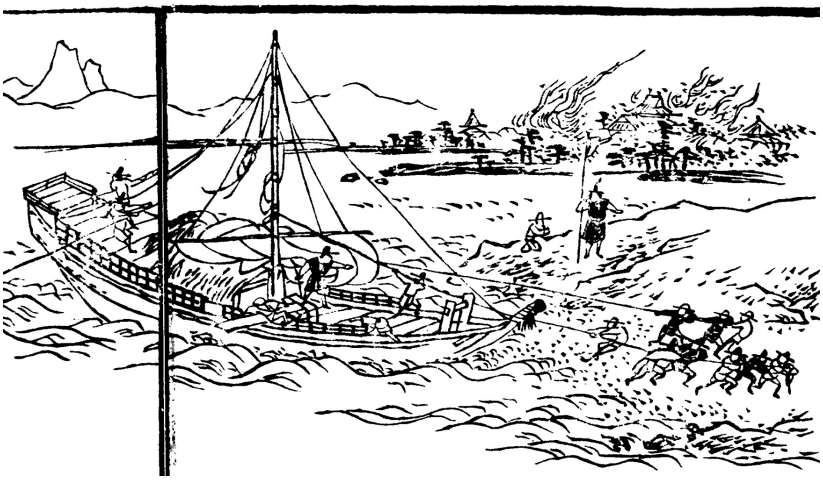

図１　『女水滸伝』巻之三挿絵（部分）

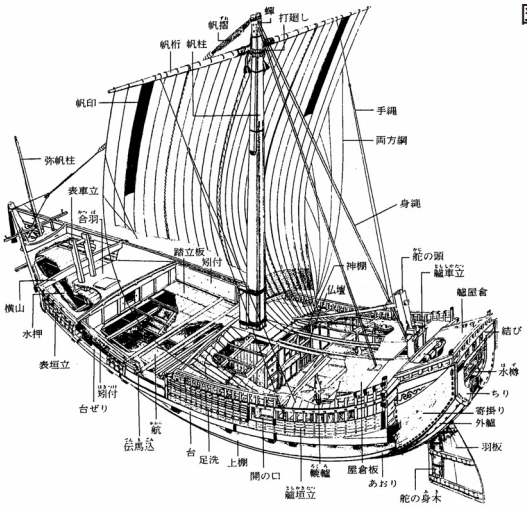

図２　弁財船

ハルシヤ（百園齊亜婆羅遮国）日本ヨリ海上五千百里南天竺ノ西辺也。即西天竺ノ内也ト云。此国天竺開闢ノ最初ノ地ナルヨシ。黄金ノ大塔アリ十五里ノ外ヨリ見ユルト云。国王アリテ仕置ス。国民富饒ナル由。（中略）能湊アル故ニ諸国往来ノ商船此湊ニ集テ財宝富饒ナル処ノ由。（巻之四）(8)

日本からこの波羅遮国に渡るためには「奇巧の船に乗ずんば歳月を積とも至ること成難」いため、八郎たち賊党は「驚浪逆風を顧ず昼夜意の如く数十里を走るの奇巧」を施した船にのってやってきたのだった。残念なことに椿園はその「奇巧」がどのようなものであるかを書いてくれない。第三回の挿絵（図1）は波羅遮国の官人がその船を押収するところを描く。江戸時代において一般的に使われた「弁財船」（図2）(9)を並べてみると、両者の形状がほとんど一致する。すなわち、椿園は文章上は意味ありげに記述しながら、当代の通常の船でしかイメージしていなかったのである。また、官人たちは日本人と異なる風体をしているのだが、長いコート様の上着を着、帽子（ｶｯ＝笠）をかぶるその姿（図3）は、どうも朝鮮人を思わせるような

のである。日本人の捉えた朝鮮人風俗の一例として、江戸山王祭りの「朝鮮人来朝のねりもの」図を『東都歳時記』から引いておこう（図4）[10]。明和元年〈一七六四〉の朝鮮通信使なら、椿園が実見しえた可能性もある。いずれにせよ、これら船舶図・官人図からは、波羅遮国を持ち出しながらその実周辺の素材で代用する程度の空想性しか窺われないのである。こうしてみると、そもそも『増補華夷通商考』を引き用いることで物語に何を導入しようとしたのかが疑問となる。

同書は「ハルシア」の前後に「守護仕置等ノ事未レ審。人倫ノ風俗ニ非ス」（ブラセル）とか、「守護并仕置ノ事不レ知。風俗人倫ノ作法ニ非ス」（ゲネイヤ）とか、統治の有無が文化の高低を意味するといった記述がある。それを参照して、「国王アリテ仕置ス」とあるところを椿園が三王の共同統治の国として作り出したこの波羅遮国を、「風俗人倫ノ作法」にかなう国と見ることができるだろうか。しかし、

此地もと荒淫の風俗にて、三人の大王龍岳が美麗なるを見て、此国の婦人とは大に優れたるを愛し、かはる〳〵妾になさんと欲す　（第三回）

と、龍岳を共有しようとしたり、宴が闌けるにつれ酩酊するや、

龍岳が容色始に見たりしとは益美麗なりと各〻見とれてうつゝなく、心魂蕩揺し、威儀を忘れ、先を争ふて互に戯れ依んとす。

（同前）

と、協定を無みして争ったりする。それに対して、語り手はこう判断を下す。

国王の身としてかく浅間しき振舞はさすがに蛮夷なりと知られける。（同前）

後に三王が争うときに、一王方についた八郎らはたやすく功績を挙げえたのだが、彼らと対比して日本人の優越を讃える意図とでも見る外はないだろう。

浜田啓介は次のように指摘している。

海外を舞台にしているという点では、『水滸後伝』及び、『椿園雑話』にその事が見える浜田弥兵衛の事跡がひんとになったものであろう。[11]

図3　波羅遮国官人

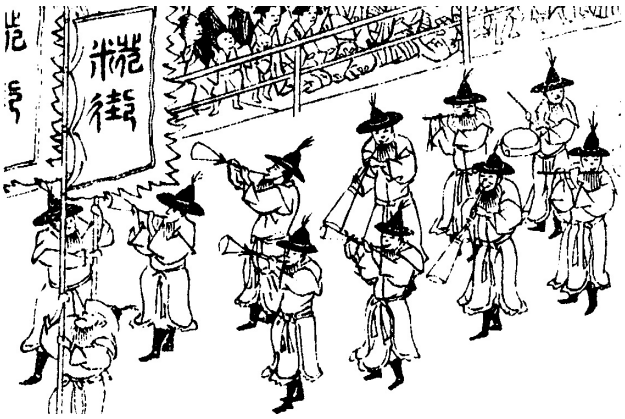

図4　『東都歳時記』山王祭

「浜田弥兵衛の一件がひんとになった」と浜田が考えるのは、日本人が海外に赴き、外国人を相手に武勇を明らかにするという点によってだと思われる。浜田弥兵衛の事件は「長崎某氏の説なり」として『椿園雑話』にも書き留められているから、椿園の知るところではあった（『椿園雑話』の記事は『増補華夷通商考』巻之三「大冤（タイワン）」の項に載る「浜田某兄弟」の記事をほとんど字句も改めずに写したものである。椿園の言う「長崎某氏」は西川如見を指す。）。しかし、浜田弥兵衛は台湾でオランダ人商館長を捕らえて長崎に連れ帰ったのであり、芦乗八郎らは外国に渡航してその地で捕らえられ牢囚されるというのだから、外国における日本人の勇敢な行動という点で共通はするけれども、かなり様相を異にする。浜田が注意深く書くように「ひんとにした」程度に取るのならともかく、必ずしも典拠関係を読み取る必要はあるまい。『増補華夷通商考』巻之四の「異船入津変災考」には、長崎での外国船に関わる事件がいくつも載る。平戸での八郎らの捕縛などは、それらを参照した結果と見てよいのではないか。

浜田の指摘のもう一点、『後水滸伝』の影響があるとするのは、先に引いた序文に、「後世に続水滸伝・後水滸伝の作あれ共……」という記述があったのに基づいてであろう。梁山泊の生き残り三十余人が邏羅国に渡って活躍する物語だから、典拠である『水滸伝』と舞台を波羅遮国にまで拡大する発想の特異さとを結ぶ線は、そこに見いだすことができるかもしれない。ただし、本作の物語展開は飽くまでも日本を中心とすると認めなければなるまい。そうするとき、波羅遮国の挿話は、夫たちを抑留させ、女のみの行動を必然化するのに機能した点に意義を見定めるべきではないか。

舞台を波羅遮国にまで拡大する発想について、一応の検討を加えたこととし、再び『水滸伝』との関係に戻ろう。

五

女賊集団は反権力の闘争にどのように関わっていくのか。

『水滸伝』は、賊でありつつ「替天行道」「忠義双全」を旗印に掲げる義士でもある存在として好漢を登場させたのだが、そこに見られる〈「悪」の主題〉を『女水滸伝』は盗賊集団から南朝義軍への転身として語っている。

春雨は白井秀蘭の占いに導かれて一統に加わったのだった。折から、頭領・副頭領が蛮国から戻らず、女の命令に従うことになったのを快からず思う熊人らの反乱があった。山塞を焼失した女賊たちは、春雨の家を新たな根拠地にしようとして山を下りる途中、とある僧院で秀蘭と再会することになる（第七回「僧院を過て再ひ卜を問／伎館を開て重て党を集」）。秀蘭は八郎らの帰国の時期を占った後、次のように言う。

某（それがし）婦人たりといへども、夫（おつと）は名和長武（なわながたけ）とて南朝（なんてう）に属（ぞく）し奉りて忠戦（ちうせん）を励（はげ）み、終（つる）に足利（あしかが）の為（ため）に討死（うちじに）せし故（ゆへ）、其欝憤（うつふん）を晴（はら）さん為（ため）、幼（いとけな）き一子（いし）をもり立、味方（みかた）をかたらひ籏（はた）を揚（あげ）んと、軍術（ぐんじゅつ）兵法（へいほう）に

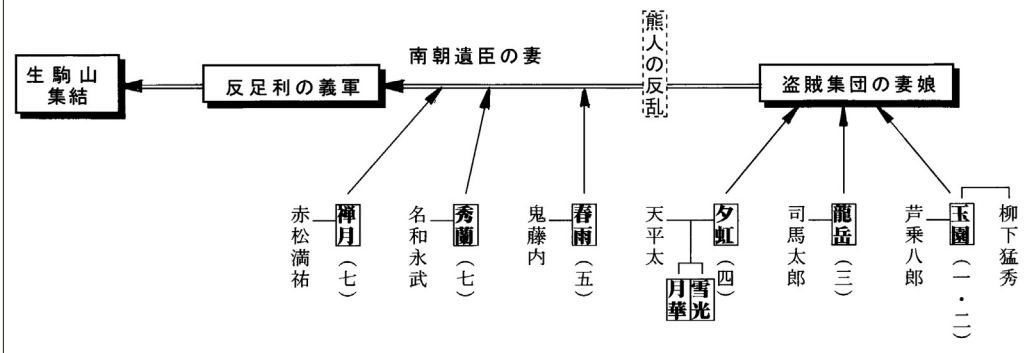

図5　『女水滸伝』の展開

心を凝して習熟し、年比計略を廻らし、如此売卜と身をやつして所々を徘徊し、時の到るを伺ふなれば、旁も我卜せしに違ずは、貞節に身を忘れ兵を起して夫の難を救んと心を金石に固めなば、共に一味して、我已にかたらひ置し味方と牒し合せ兵を揚ん、孫子も女兵を用ひし例もあり、其余女将の誉れある事和漢共に多ければ、衆心一致とならば如何なる堅陣剛敵にても何の恐るゝ事かあらん、各夫を助し上にて南朝に属し忠功を励れなば、長く賊党の譏りを免れ、名を後世に残すのみならす、足利に敵して共に雄を争ふべし……　（第七回）

南朝の忠臣名和長武（名和長年の一族らしい名前だが、虚構の人物であろう）の妻秀蘭を介して玉園ら女賊の行動は反足利の戦いへと向けられる。そうした新たな目的を持つ反幕府の賊に赤松満佑の側室禅月が加わる。

某も足利の為に亡ぼされし赤松満祐か妾なり、主君の恨みを晴さんと、尼になつて此寺に住し、一族の妻妾の存命居たる者を尼となし集め、時節を伺ふて忍び有し所、はからずも各の企を聞て欣喜に堪ず、一味せんことを願ふなり　（同前）

つまり、彼女たちの行動原理に転換があったわけである。当初の女賊たちの結集の原理が夫に関わって存在したように、この新たな行動原理も秀蘭が南朝遺臣の妻であるという夫との関わりによってもたらされている。足利に対して恨みを持つ禅月一党が一味同心するのは女賊たちの行動方針転換を後押しする。

ところで、こうして玉園ら女賊たちと秀蘭そして禅月一党が合同するのだが、それを秀蘭を頭領としての結集とする見解がある。

玉園・龍丘・夕虹・春雨等の義気旺んな女傑が秀蘭を盟主に仰いで山塞にたてこもる話になってゐる。秀蘭は名和長年の妻で、予ねて吉野朝の回復を志し軍用金を集め、諸豪傑を糾合してゐたのである。(12)

しかしそれは誤解であろう。秀蘭は謀師として尊崇を受けるにとどまる。「いざや此幸に乗して各列位を極め次第を叙で徒党の蔕を固ん」(同前)との玉園の提案に対して、『水滸伝』もどきに席順を改めるのだが、この「座次」に彼女らの序列は明らかである。

方丈に八つの倚子を列ね、中央に直したる第一の倚子には、魁首芦乗八郎が妻なればと異儀に及ばず玉園を座せしめ、夫より左方の倚子に龍岳・春雨・夕虹と三人并び、右方には秀蘭・禅月・月華・雪光と四人列れり。(同前)

「中央に直したる第一の椅子には」「異議に及ばず玉園を座せしめ」るのだから、頭領は玉園と見なければならない。左方には副将格の龍岳以下が、右方には軍師である秀蘭以下が連なるという序列である。女たちは、賊の妻・娘であるという縁によって結集を果たしてきたのであり、その中で玉園が頭領たりうるのは「伶俐にして」「侠気強」いという個人的な美質以上に、「魁首芦乗八郎が妻なれば」なのである。そこに名和・赤松の遺族が参加して行動目的が修正され、彼女たちが足利幕府に敵対する軍隊となるときでも、秀蘭はその謀師として尊敬を受けるとはいえ、決して頭領の地位についていない。その軍事的中核は首領の妻である玉園であった。

秀蘭が頭領と誤解されるのは、秀蘭の担っていた反足利の戦いへと女賊の行動目的が転じたからだろう。この物語は、女賊の頭領玉園が義軍の頭領へと転身したことをこそ書いたのである。椿園のねらいは、「賊党」から「義軍」への転換にあったと考えられるのであり、そうした構想は『水滸伝』の〈「悪」の主題〉を正当に受容した結果であったと言うべきだろう。

六

「いかほど鄙俗の書たるともみな勧善懲悪に本ずき世用人事に便なる事を含ざるはなし」と、その効用を掲げて小説を擁護した椿園は、自作においていかなる「勧善懲悪」を形象し得たのだろうか。右に見た〈「悪」の主題〉の受容がそれと関わったわけだが、一方でその不徹底さも指摘しないわけにはいかない。

物語は冒頭から足利の政治の乱れを言う。しかし、芦乗八郎らによるものにせよ、玉園たちによるものにせよ、賊の行為は必ずしもそうした政治に反抗するものといった意味づけを施されてはいなかった。『水滸伝』に繰り返される、奸臣に迫られて賊中に身を投ずるといった設定がない。図書の奸悪によって冤罪に陥れられる柳下猛秀の運命はまさに林冲に類すると言えはする。しかし、芦乗八郎の行為は犯罪

以上のものであるように語られてはいなかった。その事実を知った玉園の逡巡も不徹底と言うべきだろう。

玉園は、此家に来りてより始終武士の世を避て住といふなるを信せず、あやしく思ひしに、偖は賊党なりけるよと思へども、已に恩を蒙り、又夫妻となれる事は前生よりの宿縁なればと深くも悔ず、近レ硃者赤近レ墨者黒と、次第に同じ心となりて、八郎に武芸を習ひ、忍術を学ぶことを楽としけるに、早く熟練して、後には党類の輩と高下を試るに及び、敵する者なき程に至りける。

（第二回）

夕虹も天平太の妻となった後に夫が盗賊であることを知る。父の借財を償うために自ら遊女に身を沈めた孝女夕虹も、夫の行為を止めることはなかった。

夕虹も始の程は知ざりしに、漸く其業とする所を知覚し、強く諫め止めんとは一端欲せしかど、所詮不通には止るべからずと察し、譬へ不義非道なる輩の貲財を奪掠る共、必ず善を修し道を守る人に心を付て、必ず害をなす事勿れと戒しめける。（第四回）

不義にして富む者からのみ奪うように「戒しめ」るにとどまるのである。一党の頭領となる玉園は、その夕虹の程度にも夫の悪に拘泥するところがない。すなわち、夕虹の場合からは、賊の行為を義賊的な要素によって弁護する意図が伺われるのだし、同時に、玉園の設定からは、そうした配慮が不徹底であったことを知ることができる。これは、『水滸伝』を草賊の物語と見てそれを取り込もうとした結果だと考えるべきであろう。

第七回、春雨の家を新たな拠点とし、南朝遺臣の戦いに邁進するために「貞節に身を忘れ兵を起して夫の難を救ん」とする女たちは、次のような活動を行なった。

玉園・龍岳・春雨は昼の間は娼妓に交りて客を饗応し、夜は男子の姿にやつし已前の党を集め所々に徘徊して財宝を掠奪ふ。

前述の夕虹の配慮に通ずる秀蘭の「下知」はあった。

正直に道を守り仁慈に人を救ひ憐みて徳を積家を窺ず、貪欲邪行にして世を欺き人を苦めて富を致す者の方のみを撰み襲ひければ……

一方で遊郭を経営しつつ、他方では財宝強奪をも続けるこの奇妙な活動も、『水滸伝』の〈「悪」の主題〉を十分には形象化しえなかったことの現われだった。

また、反足利の軍を募るのが遊女宿経営に結びつけられることも異様と評せざるを得ない。秀蘭が以前のように売卜しながら竊に一味の輩を招き入れた結果、

南朝亡将の余類は、秀蘭が貞操忠心の逞きに励され、追々に集り来て、簇を揚る時を待て大に戦功を立んと心の中に勇みける。

というのはよいとして、次のような手だてはどうか。

入来る遊客の中にても智勇ありと察する者は、よく其本心を伺ひ試み、知術を尽して党中に誘引す。

項羽が「死に臨て虞氏に恋々とし」、劉邦が「呂后に心を置」いた例、

あるいは、平清盛が「常磐に迷ひ」、新田義貞が「勾当の内侍に溺れ」た例を列挙し、こう言う。

古今歴代幾人か粉黛の香餌にかゝり苦まざる者稀なれば、足利に心を傾し智士勇者も、多く心を変して次第に味方となり……

これを義軍と呼ぶには違和感が残るだろう。

倒幕という新たな行動目標を掲げ、決起の機会を窺う女たちは、軍資金を蓄えるために、遊女宿を経営するとともに富商を襲う〈賊〉的行為を続けることになる。それが抱え込む矛盾を解消するのに工夫を要するはずの義賊形象をこのように獲得しつつ、「賊党」から「義軍」への変化を構想したのは、椿園『女水滸伝』が『水滸伝』を正当に受容した結果、ただし〈義軍〉の形象化不足であったと考えられる。

七

ところで、当初の女賊結集が夫に関わって存在したごとく、この新たな行動原理も、秀蘭・禅月が南朝遺臣・反足利勢力の妻妾であったという夫との関わりによってもたらされたのだった。この〈婦徳の主題〉は、『女水滸伝』の続編執筆を阻む要因となったのではないか。

末尾の第八回で、法場を破り夫を救出した女たちは、生駒山の山塞に畠山の軍勢を迎え撃ちはするけれど、南朝方義軍としての活躍は語られぬままであった。

浜田啓介は本作末尾の完結感の弱さを指摘し、未完の可能性を言う。

最末の一文の文勢は、この後を計り期待させる文章のように読みとれる。本作がこの形で終るべきものであったかは、疑問とすべきである。(13)

が、題詩に「奇快洗心十六回」とあることに注目するならば、全体構想は全十六回だったと考えられる。未刊行の全「十六回」の稿本を読んだと語る「皇都笑花逸翁」は、あるいは作者自身の別名であるかもしれない。ともあれ、本書がその前半部分にあたるのは明らかであり、後編を併せて全体と成そうとする意図だけは確認しうる。

しかし、後編の構想を具体的に立てていたのではなかっただろう。生駒山への結集の後、足利との戦いが中心主題となるとき、椿園は困難を抱え込むことになったのではないか。

嘉吉の乱以後という時代設定からすれば、史実に反する反足利の戦いをどのように語りえたかが、まず疑問に思われる。それ以上に問題なのは、夫の不在という状態においてこそ主体性を獲得しえた女たちが、夫の帰還後もそれを保持するのは困難だったのではないかということである。女賊結集の紐帯となった夫たちの盗賊集団が復活したとき、女たちが党を主導する理由は消滅するであろう。

男たちは、女賊によって運営されてきた集団にどのように復帰したのか。

四人は斉しく秀蘭を拝し、君が卜筮の妙、謀略の深きによらずんば、何ぞ如斯諸婦心を一致にして我々に再会するの時を得んや。鴻恩何を以てか謝せん、殊に君は南朝の忠臣名和長武公の令室な

りし由、亡夫の志節を請継、勲功を立んと願ひたまふ貞操の比ひなき、深く感伏するに堪ず、今より我々師と仰ぎて万つ指揮を請んことを願ふなりと謝し、又禅月にむかひ、君も又亡主赤松氏の遺恨を報ぜんと時を待たまふ節義の逞しき、殊に今日我々を助けて働きたまふ勇壮なる体、丈夫にも稀なる所なり、此後骨肉の親をなして恩恵を謝すべしと演説す。　（第八回）

八郎たちは南朝忠臣の妻である秀蘭の節義に感服し、足利のために滅ぼされた赤松の妾禅月に対してもその節義を賞賛する。さらに秀蘭の謀才に感服して指揮に従おうと言うのだし、そうして、自ら反足利幕府の戦いに加わっていくのである。長い牢獄暮らしの疲れを癒すためとして、山塞を攻める畠山軍との戦闘に加わらなかったから、前編は〈女〉の物語として貫かれえた。しかし、男たちが反足利の戦いに転身していく構想を想定すると、その場合、後編における女たち中心の展開が脅かされるだろう。

盗賊集団に復帰した男たちはその中でどのような位置を占めることになるのか、そして女たち主導の集団はどのように変質することになるのかが、『女水滸伝』後編のありようを決定するはずである。『水滸伝』を模した例の席決めに注目しよう。

中央なる庁上に倚子をつらね虎豹の皮敷たるに上り、次第を正して座をしむれば……　（同前）

ここでの「次第」がどのようなものであったのかは書かれていない。しかし、小賊が畠山壱岐守の軍勢三千余騎の襲来を報じたときの動きから、それを推測することができる。

芦乗八郎は、途中に出てふせぐべきや、山へおびきよせて討べきや、軍議いかにと席を見まはしければ、秀蘭座をすゝみ出、畠山は暗愚にして軍法にうとき将なれば、かれが首ははや我手ににぎりたるがごとし、四君は手を下さず、枕をたかくして多年の疲労をはらしたまふべし、我は謀をもつて明日容易打やぶるべしと、龍岳・春雨と手筈を極め、自ら三百余騎を従へ麓近くに出て陣をしき、寄るを待て居たりける。　（同前）

芦乗八郎が頭領の座に着いているのは確かであろう。秀蘭の指揮に従って戦闘が行われはするけれども、秀蘭は軍師の位置にとどまる。しかも、実戦部隊の中心は龍岳・春雨であった。そのとき、女賊集団の頭領であったはずの玉園は、夫の蔭にかくれて、もはや積極的な行動を見せない。とすれば、玉園に領導されてきたはずの女賊集団は、そしてその物語である『女水滸伝』は、大きく変質したと見なければならない。

頭領の座に芦乗八郎が復帰した以上、この後の反足利の戦いにおいては、男たちが主導権を握ることになるはずである。後編では女たち中心の展開が脅かされると考えないわけにはいかない。その存在が語られるのみで実際には登場しない名和長武の遺児（秀蘭の子）。浜田はこれを未刊の根拠の一つとして取り上げた。それにしたがって、その遺児が新たに一統を支配する地位につくことで賊塞の再編がなされると考えるにしても、やはり「女水滸伝」的構想は崩れるしかない。

中絶の理由は、後編の不可能性にもあったのではないだろうか。

（1）　引用は、『随筆百花苑』第5巻（昭57・4、中央公論社）所収の本文（浜田啓介校訂）による。以下、同。

（2）　引用は、宮城県立図書館伊達文庫蔵本による（漢文序を書き下し文に改めた）。

（3）　『日本古典文学大辞典』第一巻（昭和58・10、岩波書店）「女水滸伝」の項（浜田啓介執筆）参照。

（4）　徳田武『日本近世小説と中国小説』（日本書誌学大系51、昭62・5、青裳堂書店）第三部「長編読本の成立と展開」第三章「『復讐奇談稚枝鳩』と『石点頭』」参照。

（5）　横山邦治『読本の研究』（昭和49・4、風間書房）第三章「終結期の読本」第一節「稗史ものの諸相」参照。

（6）　（5）に同じ。

（7）　杉田英明『日本人の中東発見　逆遠近法のなかの比較文化史』（平7・6、東京大学出版会）参照。

（8）　引用は、東北大学附属図書館狩野文庫蔵本による。以下、同。

（9）　日本史広辞典編集委員会編『日本史広辞典』（平成9・10、山川出版社）「弁財船」の項から転載した。

（10）　引用は、東北大学附属図書館狩野文庫蔵本による。

（11）　浜田啓介「伊丹椿園は津国屋善五郎なり」（『近世文学作家と作品』、昭和48・1、中央公論社、所収）参照。

（12）　麻生磯次『江戸文学と中国文学』（昭21・5、三省堂）前篇「近世文学の支那的原拠」第一章「読本の発生と支那文学の影響」、暉峻康隆『江戸文学辞典』（昭15・4、冨山房）「女水滸伝」の項、など参照。

（13）　（11）に同じ。

〈付記〉　『女水滸伝』本文の引用は、国立国会図書館蔵本の翻刻である石川秀巳・磯貝寛子・宝田かほる編「〈翻刻〉女水滸伝」（『読本研究』第九輯、平7・10）による。なお右の翻刻に付した「解題」に、本論の要旨のみを発表したことがある。